



自然栽培パーティの4

# 心強い「仲間」がいれば

生き方も見つめなおして、自然栽培に出会った人がいる。障害者福祉と結びつけた人もいる。仕事の運び方は、お金儲けだけではないことも教えてくれた福岡県糸島で自然栽培に取り組む人たち。自然栽培パーティのメンバー「さんすまいる伊都&いとキッズ」の活動を通してお伝えしたい。

編集部=文  
text by KOTONONE  
岸本 剛=写真  
photograph by Tsuyoshi Kishimoto



自然栽培の「トキワ荘」か

「お昼食べないですよ。用意しているから。」

取材当日、「さんすまいる」理事長、池田浩行さんから電話をもらった。ありがたいけど、着いたらすぐ取材にかかりたい、と答えると、「いや、ダメだよ。自然栽培の野菜料理なんだから」と返ってきた。そりゃあ、好意を受けられないわけにはいかない。

車は、畑の中の一軒家に着いた。どう見ても、レストランには見えない。古い農家だ。池田さんは、さつさと家の中に消えた。ガタビシときしむ戸を開けると、狭いたたきに靴があふれていた。元気な話し声もあふれていた。

隣の部屋いっぱい、大きなテーブルを二つないで、食卓ができていた。大皿や大鉢に盛りられた料理も、あふれていた。ここは、どこなんだ、どんな人たちなのか、わからないままに、正面に座った池田さんが、「さあ、座つ

て、座つて」と言うと、「いただきます」という声が響いた。

「『いとハウス』というシェアハウスで、ぼくらがお世話になっている大石ファームという地元の農家さんが運営してるんです」と池田さん。新鮮な野菜の煮物をほおばりながら、だんだん状況が見えてくる。二階は住民四人が暮らす四部屋、一階は共用の食堂。「野菜を持ち寄って、仲間とときどき食事をする」と言う。なるほど、糸島で自然栽培を営む農家の寄り合い所になっているのだ。

向かいの席に座っていたのは、近くの農園「卵(うさぎ)農園」の三角麻里子さんと山口章さん。三角さんは五年前まで、福岡の絵本屋さんで働いていたが、「急にやりたくなくて」農家に転身。近くで農業に取り組んでいた山口さんと意気投合して、いっしょにやっている。農薬や化学肥料を使わず育てた野菜は、少しずつファンもついてきた。けれど正直、まだ経営はきびしい。「一〇年

間、食べられないっていうのはわかってたので。少しずつ技術を積み上げて、収穫量も野菜の種類も増やしていけたら…」と、三角さん。大変なはずなのに、表情は晴れやかだ。戦後、漫画面化をつくった手塚治虫、石森章太郎、赤塚不二夫らを送り出した「トキワ荘」が浮かんできた。何かを生み出すエネルギーがあふれていた。

なるほど、池田さんが、ここから取材をスタートさせたかった訳が見えてきた。「大変だけれど、ほんと楽しくやってる」との思いをまず伝えたかったのだろう。